

和讃と聞く

其の二九四

親鸞さまの

【本文】

三 さんちようじようど だいしとう
朝浄 土の大師等

あいみんしようじゆ
哀愍 摂 受したまひて

眞実信心すすめしむ

じようじゆ
定 聚のくらゐにいれしめよ

【意記】

インド、中国、日本において、浄土の教えを受け継がれてきた高僧方は、世の人々を慮り、哀れに思い、自分の事のようにお引き受け下さりて、

阿弥陀様の「この阿弥陀を抛り所となさい」との仰せを素直に聞き受ける心、信心をお勧め下さいました。

お陰様で、必ず仏に成ることが決定された位に身を置くことができるのです。

【私の味わい】

先に生まれた人は、後の人々を導きなさい。後に生まれた人は、先に生まれた人を尋ねなさい。こうして、お浄土のみ教えは尽きることなく、永々と受け継がれていくのですよ。そう、親鸞聖人は教えて下さっています。

漢字だけで見ると、「先生」という言葉は「先に生まれし者と書きます。では単に生年月日が早いだけ、なのでしょいかいや、その言葉には、尊敬すべき人、教えを授ける人という意味が現実には加味されています。「先生は尊敬され、知識や経験を伝え、えんき人、もう少し言えばその責任がある人と言えます。

一方、後に生まれた人は、「先生」と呼び、敬い、敬いを持って接し、教えを謙虚に受け入れる立場です。そして、同時に「先生」として後の人を導いていく。

お釈迦様に始まって、印中日と教えを伝えて下さった方々を「先生」として親鸞聖人は敬われ、同時に後世の人にその教えを伝えておられます。極楽浄土に往生させていただくみ教えは、私達の生きること命終えることを支えて下さる。み教えを聞いて聞いて聞き抜いていけよ、そのように「先生」方は伝えて下さったよと。

印中日の高僧方、そして親鸞聖人は正しく私達の「先生」です。

その一方で、私達は好むと好まざるに関わらず「先生」の立場に身を置く者でもあります。先達と同じことは出来なくても、お念仏の生活を送る、聴聞の場に連なる、お仏事を身内に勤める、その一つ一つが先達の恩に報いることになるのです。（悠水